優秀賞

今、自分が在るのは…

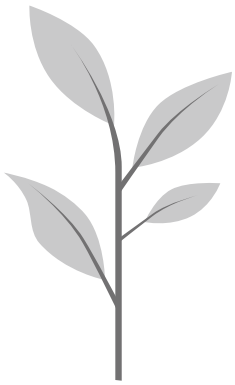
ひたちなか市立大島中学校　三年
鈴木（すずき）　朔（さく）

私は今日、
どこかの花のための
虻だったかもしれない
そして明日は
誰かが
私という花のための
虻であるかもしれない

中学三年の国語の教科書に載っている「生命は」という詩の一部です。生命ある者は皆、互いに支え合っているというのです。私は、この詩にとても共感しました。

私は、今でこそ元気に走ることができ、みんなと一緒に体育ができ、部活動もバスケ部に入って大会等にも出場できていますが、小学五年生までは、普通に運動することができませんでした。五歳の頃、希少な癌が足の骨の中に見つかり、東京の病院に入院していました。まだ五歳だったけれど、家族と離れる生活をすることになったので、そこでの生活はよく覚えています。また手術は、足の腫瘍部分を切除して、骨移植をする十時間にも及ぶ大手術でしたが、主治医の川井先生のおかげで、無事成功しました。その後の入院期間中も、川井先生は毎日回診しにきてくれました。また、小学二年生までずっと運動を禁止され、外で遊べなかった自分は、たえられず川井先生に「運動がしたい」と言いました。川井先生はユニークな先生だったので「骨が折れてもまた俺が何とかしてやる」と言って運動制限を徐々に解除してくれました。今、両足でみんなと同じように生活ができているのは、川井先生という素晴らしい先生に出会えたからだと、とても感謝しています。

手術後は、創外固定をつけることによって退院することができました。退院後、すぐに小学校の入学式がありました。自分の足には大きな金属がついている状態だったので、友達にどう思われるか心配でした。しかし、学校の友達はみんな優しく、不安はすぐに吹きとびました。創外固定をとる手術の時には、クラス全員から応援の手紙をもらいました。一度手術を経験していたため、とても怖かったのですが、その手紙により、手術に前向きになることができました。体育の授業は、小学五年生まで見学でした。見学している時、授業中なのに、しつこくちょっかいを出してくる友達がいて、当時は少し腹が立ちましたが、今思えばその友達は、自分を笑わせてくれ、一人ではないと思わせてくれていたのです。彼なりの優しさだったのです。思い返せば、辛いことも友達がいたから乗りこえられました。友達は私にとって、かけがえのない存在なのだと思いました。

そして、一番身近で支えてくれたのは両親です。父は、体力づくりのために毎朝、重いボールを使った体幹トレーニングをしてくれました。母は、入院中毎日茨城と東京を往復してお見舞いに来てくれました。小学校にあがってからは、創外固定がはずれるまで、登下校は母が付き添ってくれました。私の不安を少しでも減らそうと、両親はいつも私のことを考え、私のために行動してくれたのです。

私は今、人は誰でも、誰かのおかげで生きられていると、強く感じています。五歳という幼さで病気と闘い、死と向き合うという大きな孤独と恐怖。それは私にとって、とても過酷な経験でした。でも、自分が今こうして何不自由なく生活できるのは、本当に自分を支えてくれた多くの人達のおかげだという、とても大切なことを実感できた経験でもあります。私は、将来どんな職業につくのか決まっておらず、何者になるかまだ分かりません。でも、多くの人に助けられ、支えられ、生かされたこの命を、今度はたくさんの人を助け、支え、生かすことに役立てたいと思っています。そして、誰かのため、また多くの人のための何者にでもなれるよう、今自分ができる精一杯のことをやっていこうと思います。勉強も、人への気遣いや優しさも、必ず未来のための自分や人のためになると思っています。私はこれからも多くの人に助けられ、支えてもらって生きていきます。そして私もまた、生かされているという感謝の気持ちをもち、人のために、生きていきます。